

6

骨腫瘍を疑った足部舟状骨骨髓炎の一症例

東京医大霞ヶ浦病院 整形外科

○会沢義之、正岡利紀、西川 真、
高山俊明、井上全夫、市丸勝二

骨腫瘍を疑い、術前の診断が困難であった稀な足部舟状骨骨髓炎を経験したので報告する。症例は23歳男性。主訴は左足部痛及び腫脹。特に誘因無く歩行時に主訴が出現。既往に7年前、左両下腿骨開放骨折の診断の下に観血的整復術を施行されている。左足背中央内側に疼痛・腫脹・熱感・圧痛を認め荷重歩行困難で、血液生化学検査は異常無く炎症反応も陰性であった。単純X線及び断層写真にて、舟状骨内側から背側にかけての骨融解像とCTで舟状骨内部に虫喰い様病変を認め、MRI axial 像に於いては、舟状骨から楔状骨にかけてT1強調像でほぼ均一な low signal・T2 強調像で一部に low signal が斑状に散在する high signal を認めた。DSAによるAngiographyでは、舟状骨を中心に hyper vascular を呈し、骨シンチで同部に著明な集積像を認めた。以上より骨腫瘍も疑われ、生検を兼ねて手術を施行した。術中迅速病理で悪性所見は認めず骨髄炎と判断し、病巣搔爬と3週間の持続灌流後骨移植術を施行した。足部に発生する骨髄炎は比較的稀で全骨髄炎中約10%程度で、我々が渉猟し得た範囲では本邦104例で舟状骨は自験例を含み4例であった。そのうち1例と自験例ではそれぞれ黄色ブドウ球菌と表皮ブドウ球菌が検出され、それぞれ病巣搔爬と抗生剤投与・病巣搔爬と持続灌流後骨移植が施行され治癒している。諸家の報告では扁平骨・短管骨の骨髄炎は長管骨に比べ約20%程度と少なく、足根骨に限ると全骨髄炎中3~10%で、足部で最も多い踵骨でも全血行性骨髄炎の3~8%程度であった。これは主に海綿骨から成り側副血管が多く、血流の循環が良く菌が停留しにくい為だとされている。以上頻度は少ないが、足根骨病変に於いて血行性骨髄炎の存在も一応念頭に置き日常診療を行うことが重要と思われた。

7

帯状疱疹患者における髄膜炎現象の検討

○梅澤慶紀、平田雅子、市川眞喜子、大井綱郎
(東京医大八王子医療センター皮膚科)

帯状疱疹では軽度の髄液細胞数増多から髄膜刺激症状伴う髄膜炎例までのスペクトルが存在し、これらを包括する語として、髄膜炎現象なる名称を用いている。我々は、平成5年5月から平成6年5月までの1年間に、八王子医療センター皮膚科外来で帯状疱疹と診断し腰椎穿刺を施行し得た47例についてこれらを検討した。

47例中細胞数が31以上と増加している患者は21例である。性差および罹患年齢は、男18例、女29例であり、そのうち男11例、女10例に髄液中の細胞数の増多を認めた。細胞数の数により分けると、軽度上昇群は11例、中等度上昇群は8例、重度群は2例であった。これらのなかで帯状疱疹抗体価の上昇を認めたものは正常群が0例、軽度群が7例、中等度群が8例、重度群が2例であった。三叉神経領域に帯状疱疹の生じた患者15例中、13例に細胞数増多がみられ、脊髄神経領域では32例中8例に細胞増多が認められた。内臓悪性腫瘍、糖尿病、膠原病などを有する患者は8例認められたが、そのうち細胞数増多を示したのは4例であった。またこれらの基礎疾患のない患者39例中、細胞数増多を認めた患者は17例であった。汎発疹を伴うものは、細胞数増多群の21例中5例に見られ、正常群26例中でも4例あった。髄液細胞数の重症度と臨床症状の関係では、髄液中の細胞数が高度に上昇している症例では、髄膜炎にみられるような臨床症状を呈するが、軽度群・中等度群では髄液中の細胞数の増多を認めても、臨床症状を欠く例が多く見られた。

帯状疱疹に髄膜炎現象が認められることはあまり知られておらず、臨床症状と関連しないことが特徴の1つとされているが、その合併率は比較的高く充分注意する必要があると思われる。